

1. 京丹後市須田平野古墳の調査（3）

京都府立大学文学部考古学研究室

1. はじめに

京都府立大学文学部歴史学科考古学研究室では、2020 年より京丹後市教育委員会・京丹後市久美浜町須田区などと共同で、京丹後市湯舟坂 2 号墳およびその周辺に分布する古墳の学術的価値を明らかにするとともに、その成果を地域資源として活用するための様々な取り組みをおこなっている（本書 I -2 参照）。とりわけ 2022 年度より湯舟坂 2 号墳の至近に位置し、先行する首長墳と目されながらも墳丘形態や築造時期などの評価の定まっていない須田平野古墳の調査に着手しており、昨年度より京丹後市教育委員会と共同で墳丘、石室の発掘調査を実施している。本稿では、昨年度に実施した発掘調査の成果について報告する。

なお調査は 2023 年 9 月 19 日～10 月 2 日に実施し、参加者は以下の通りである（所属はすべて調査時点）。

奥勇介（京丹後市教育委員会）、菱田哲郎、諫早直人（以上教員）、井川瑞季、瀬川裕太郎、守田悠、吉永健人（以上博士前期課程）、大倉響稀、大須賀丈汰郎、重野正和、西島翼、山内愛弓、横白彩江（以上 4 回生）、石川達葵、岡崎壮太、越川輝、本田龍平、依田萌奈（以上 3 回生）、藤川聖起（京都大学大学院修士課程）

調査にあたっては地権者の土出正信氏をはじめ、須田区の皆様には大変お世話になった。また 9 月 30 日に現地説明会をおこない、約 50 名の参加を得たほか、調査期間中、多くの方にご来訪いただき、現地にてご指導いただいたことを明記し、感謝の意を表したい。（諫早直人）

2. 既往の研究

須田平野古墳は、京丹後市久美浜町須田小字東側に所在する横穴式石室墳である。須田平野古墳についての最初の本格的な言及は、1920 年刊行の『京都府史蹟勝地調査會報告』第二冊にみられる。本書において梅原末治は「平野ノ古墳」と称し、墳丘高や石室長について記述するとともに、石室の実測図を掲載している。墳形については「圓墳」と推定しており、「熊野郡ニ於イテハ最モ大ナル古墳ノ一トシテ、又比較的完存セル點ヨリ地方ノ史蹟トシテ尊重スベキモノナリ」と高く評価した（梅原 1920：144 頁）。

梅原の報告は 1923 年刊行の『京都府熊野郡誌』（京都府熊野郡役所 1923）にもそのまま引用されているが、郡誌編纂にあたって作成された調査書に、以下のような記載がみられる。

【史料】「郡誌編纂材料川上村調査書」「佐治家資料」（神谷神社蔵）

字須田

一、古墳其他

蝙蝠穴 字平野大ナル石槨 奥行二間二尺〔約 4.2m〕／巾一間一尺〔約 2.1m〕

高七尺〔約 2.1m〕 隧道二間半〔約 4.5m〕

九十九塚 小字クレ石

石穴 ロクンザニアリ 村外レヨリ約一二三町

横穴 山腹ニ六個アリ 小字オノミヤ（後略）

「平野」という字名を冠すること、上記寸法は現在の須田平野古墳の横穴式石室の計測値と概ね一致することから、須田平野古墳についての記載であることが明白である。これから須田平野古墳が当時、地元で「蝙蝠穴^{こうもりあな}」と呼ばれていたことがわかる。石室内で百姓一揆の謀議や賭博がおこなれたという伝承もあり（奥村編 1983）、石室は少なくとも近世には開口しており、地元住民に知られていたものとみられる。

1968～1969年には同志社大学考古学研究会によって「平野古墳」の石室実測および墳丘測量調査がおこなわれ、墳形について新たに方墳の可能性が指摘された（田中 1973、山内 1988、山口 2014）。この際作成された実測図は、1988年刊行の『畑大塚古墳群』にて、周辺遺跡として須田平野古墳を紹介する際に初めて掲載された。実測図を付した上で、伯耆谷にみられる総数 100 基以上の古墳の中でも、須田平野古墳は最古期の横穴式石室墳であると述べている（山内 1988）。

また、1983年刊行の『湯舟坂 2 号墳』でも、周辺遺跡として須田平野古墳が挙げられている。湯舟坂 2 号墳と同様に巨石を用いた横穴式石室を持つと記され、墳形に関しては新たに前方後円墳の可能性が指摘された（奥村編 1983）。またこの段階で伯耆谷の古墳群を「須田古墳群」と呼称するようになるが、「平野古墳」という名称はそのまま、2004年刊行の『久美浜町史』から「須田平野古墳」という名称が使われるようになり（久美浜町史編纂委員会編 2004）、京都府遺跡地図でもその名称で登録されている⁽¹⁾。

古くから開口しており副葬品などの手がかりはないものの、古墳の築造時期については石室の形態をもとに古墳時代後期後葉とされてきた（田中 1973、山内 1988、久美浜町史編纂委員会編 2004）。石室の構築技法に着目し、丹後地域の主要河川ごとに畿内系横穴式石室を整理した細川康晴は、須田平野古墳を湯舟坂 2 号墳に先行すると位置づけている（細川 2000）。

以上、須田平野古墳の研究史を概観した。須田平野古墳が伯耆谷一帯では唯一実態の明らかな湯舟坂 2 号墳に先行する首長墳と目され、その重要性が指摘される一方で、墳形については評価が定まっておらず、築造時期についても、手がかりを欠く状況にあった。そこで当研究室では、2022 年度に須田平野古墳の墳丘測量および横穴式石室の実測を実施したが（京都府立大学文学部考古学研究室 2023）、争点となっていた墳形については、円墳の可能性が高いとしつつも確定には至らなかった。

3. 調査の方法と経過

2023 年度の発掘調査では、墳形や規模を確認することを目的として墳丘周辺に 2 つのトレンチを、さらに 2022 年度の測量調査で確認した墳丘南東方の須恵器散布地に 1 つのトレンチを設け、計 3 トレンチを調査した。以下日ごとの進捗を示す。



写真1 第2トレンチ発掘風景



写真2 高龍小学校の古墳見学ツアー

- 9月19日（火） 調査前写真の撮影、基準杭の確認。
- 9月20日（水） トレンチ設定、掘削開始。同時並行で石室の天井図の実測をおこなう。
- 9月21日（木） 午前、掘削。第1トレンチB区を新規設定。午後、降雨のため作業中断。
- 9月22日（金） 午前、降雨のため宿舎で湯舟坂遺跡の遺物整理。午後、掘削。石室実測を終え、第3トレンチB区を新規設定。
- 9月23日（土） 掘削。出土状況の写真撮影。第2トレンチでサブトレンチ設定。
- 9月24日（日） 午前、須田区民向けの地元説明会を実施。午後、掘削。
- 9月25日（月） 午前、高龍小学校の古墳見学ツアーを実施。午後、掘削。第1トレンチB区、第3トレンチA区でサブトレンチ設定。
- 9月26日（火） 掘削。第2トレンチ完掘。第3トレンチB区でサブトレンチ設定。
- 9月27日（水） 午前、高齢者大学久美浜学園一行来訪。掘削、土層断面図作成。
- 9月28日（木） 掘削、土層断面図作成。第3トレンチA・B区完掘。
- 9月29日（金） 第1トレンチ完掘。図面作成。
- 9月30日（土） 現地説明会。図面作成。
- 10月1日（日） 第1トレンチ、第3トレンチ埋め戻し。
- 10月2日（月） 第2トレンチ埋め戻し。撤収。（横白彩江）

4. 調査の成果

（1）第1トレンチ

①調査区の設定

2022年度に実施した測量調査で、須田平野古墳南東方からのびる尾根の張り出し部から斜面にかけて、多数の須恵器片が散布していることを確認した（図1参照）。特に張り出し部上面においては、表土に半ば包含される形で須恵器片が集中的に散布している状況が確認でき、一方、北方斜面においては、須恵器片数点が疎らに散布しており、斜面上方から流れ落ちたものと推測できた。こうした地形的特徴と、須恵器の集中的な散布状況から、当該地点に、埋葬施設あるいは須田平野古墳に関連する何らかの遺構の存在が見込まれた。これを受け、本調査では、須恵器片の出土状況と、関連する遺構の有無の確認、および隣接する須田平野古墳との関係を明らかにすることを目的として、須恵器が最も集中する地点を中心に第1トレンチを設定し、調査をおこなった（図2）。

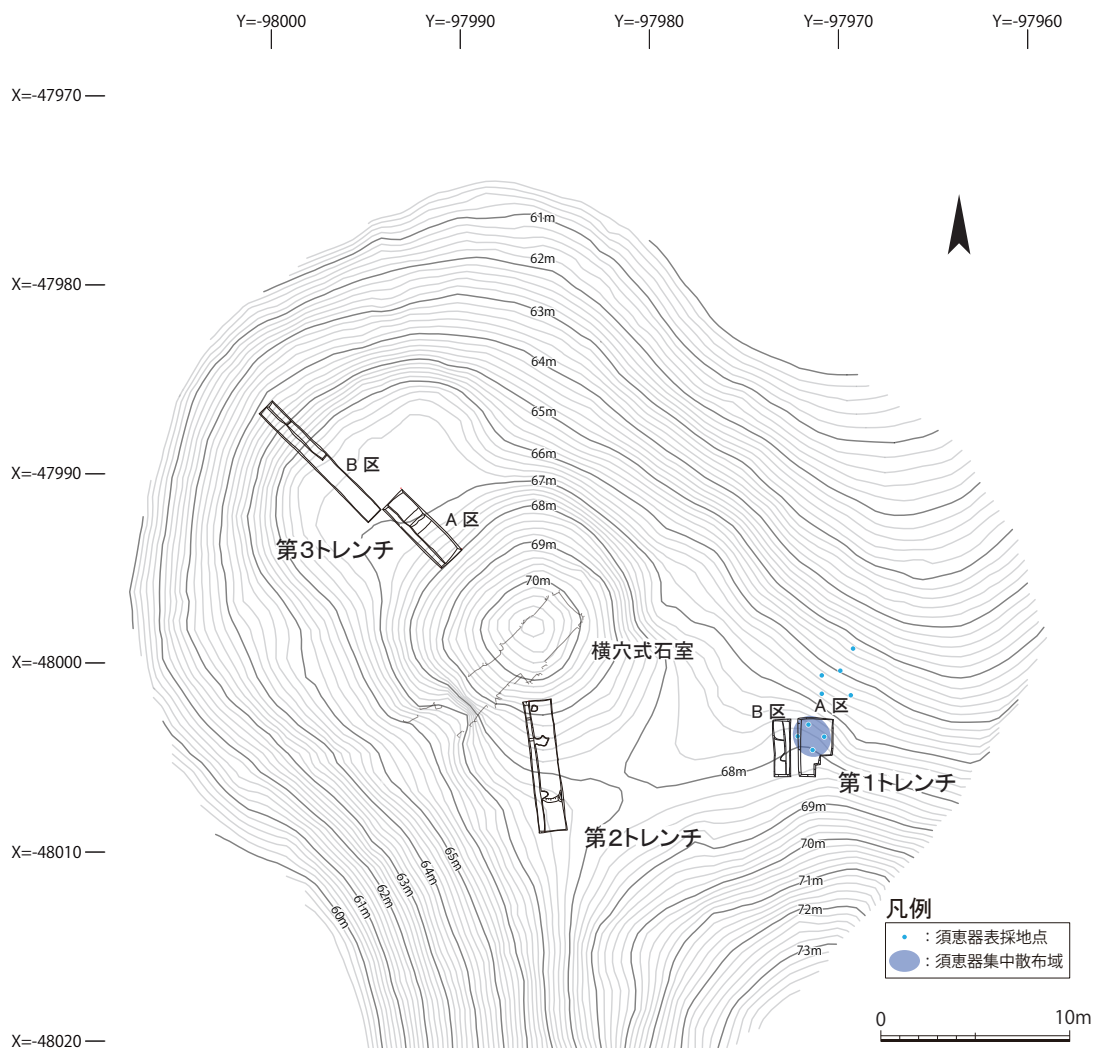


図1 須田平野古墳調査区位置図 (S=1/400)

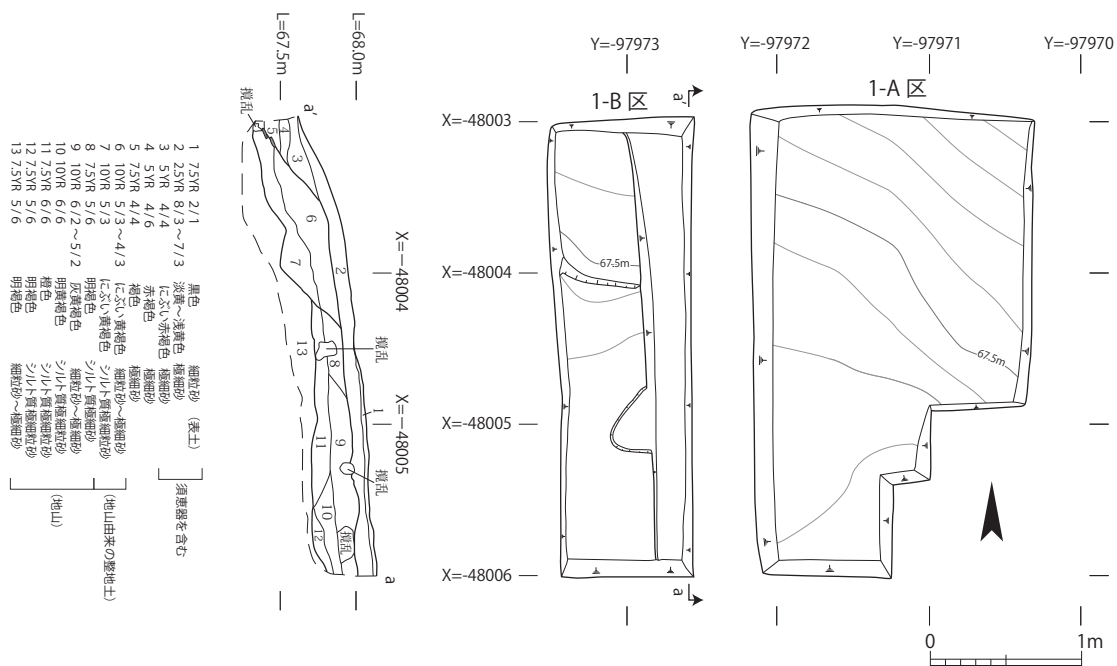


図2 第1トレンチ 平面・土層断面図 (S=1/50)

②層序と遺構

層序 第1トレンチでは、表土である第1層の下層に、須恵器片を多数含む第2層が堆積する。それより下層は、1-A区と1-B区で様相が異なるため、各区の報告で詳細に述べる。

1-A区 須恵器片が多数表採された地点を中心に、南北3.0m×東西1.8mのトレンチを設けた。木の繁茂しているところを避けたため、最終的な調査区の面積は約4.6㎡である。

全体的に表土（第1層）の堆積は薄く、南半部の厚いところでは約3.0cm、斜面となる北半部では下方に土砂が流出してほとんど堆積が認められない状況であった。掘削を開始したところ、表土とその直下の第2層に包含される状態で須恵器片が多数出土した。そのうち第2層出土資料の中には、第2層底面すなわち第6層と第8・9層の上面で出土したものが存在していたことから、第6・8・9層上面で遺構検出をおこなった。また、須恵器片は第1・2層の中で重複していたため、大きく4段階に分けて検出し、出土位置の記録をおこなった（写真3～6）。

1-B区 1-A区の西側に、南北3.0m×東西0.8m、2.4㎡のトレンチを、1-B区として設けた。

B区では土層を把握するため、東側に0.2m幅のサブトレンチを設定した。サブトレンチ北端部付近では、第2層より下層において、一部粘土ブロックを含む赤褐色系の土色を呈する第3～5層が確認できた。遺物は第5層直下と第3層中で甕の破片が5点出土した。これらの状況から、第3～5層は斜面上方からの流土ではなく、人為堆積層であり、出土した須恵器片は、これらが堆積する際に混入した可能性が高い。なおこれらの層は1-A区では確認できなかった。

また調査区中央から北にかけて確認できた第6・7層は、地山とみられる第8～12層とよく似ていることから、地山由来の整地土と考えられる。これらの状況と、1-A区における須恵器の出土状況に鑑みれば、第2層直下の第6・8・9層上面が本来須恵器を置くための平坦面



写真3 1-A区遺物出土状況第1段階（北西から）



写真4 1-A区遺物出土状況第2段階（北東から）



写真5 1-A区遺物出土状況第3段階（北東から）



写真6 1-A区遺物出土状況第4段階（北東から）

として整備された蓋然性が高い。なお、1-B区での遺物の出土は、サブトレンチ北端部で甕の破片5点が集中して出土したが、他は2点が疎らに出土したのみで、1-A区に比べて遺物の分布は極めて希薄である。（吉永健人）

③遺物の出土状況

第1トレンチからは271点もの須恵器片が出土した（表1）。先述のようにそのほとんどは1-A区の第2層内で重複するように出土したものであり、遺物の平面的なまとまりからさらにA-a～A-f地点に出土地点を細分できる（図3）。A-a地点からは甕の破片が多数出土したほか、高杯蓋（図4-1。以下図4を省略）2片が出土した。この地点には比較的まばらに須恵器片が広がっており、これらは斜面の上から下へ流れるような向きで出土していることから、斜面上方側から倒れ込んだものと推測される。A-b地点、A-c地点からも同様に甕の破片が出土して

表1 第1トレンチ遺物出土状況

出土地点		甕		杯類	高杯蓋	無蓋高杯	瓶類
		1・2層	3・5層				
1-A区	A-a	33	—	0	2	0	0
	A-b	25	—	0	0	0	0
	A-c	18	—	0	0	0	0
	A-d	65	—	2	0	15	0
	A-e	18	—	1	0	0	6
	A-f	1	—	0	0	0	4
1-B区		1	5	0	0	0	1

※取り上げ時に座標を記録していない須恵器片は表中に含めていない。

いる。A-d地点では甕のほか、無蓋高杯や杯類の破片が出土した。他地点に比べ須恵器片が密集しているうえ、甕の破片も折り重なるように出土しており、比較的原位置を留めているものとみられる。A-e地点からは甕（5）のほか瓶類（3）など小型の器種が出土した。A-f地点から

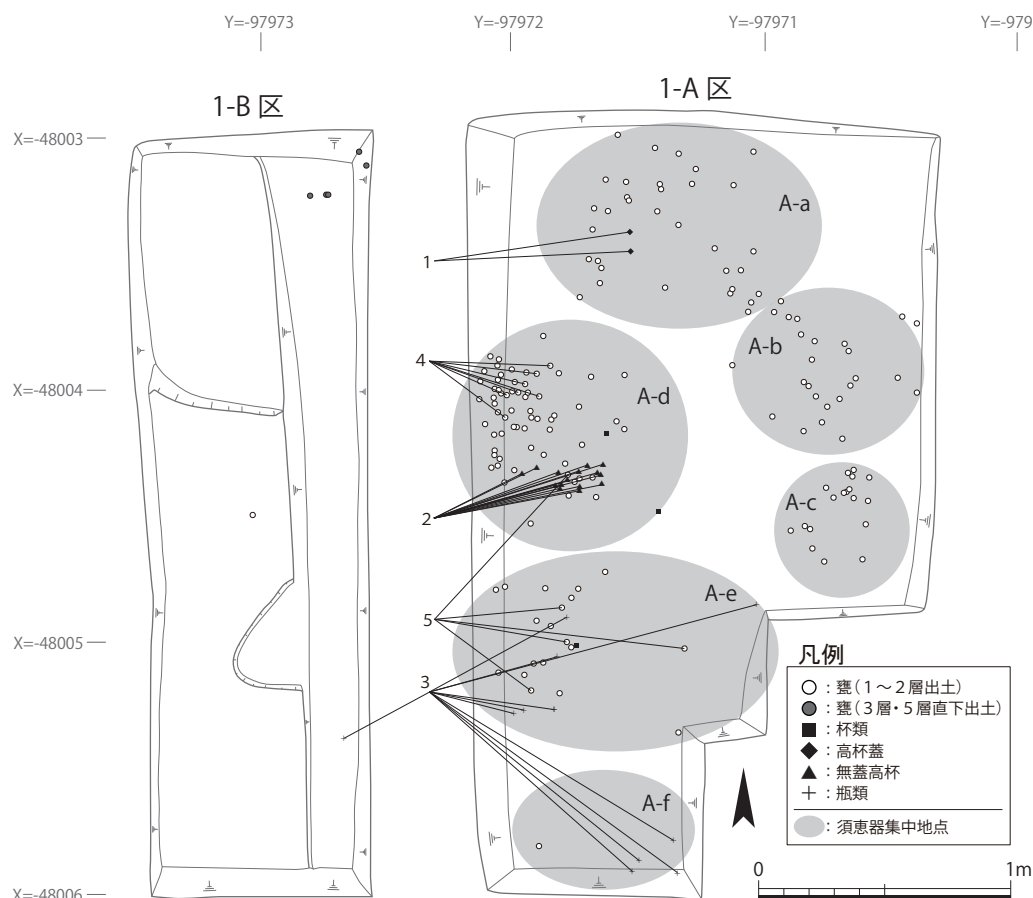


図3 第1トレンチ遺物出土状況（S=1/30）（番号は図4に対応）

も少数ではあるが甕や瓶類が出土しており、トレンチ南壁にも須恵器片が認められたため、より南方の斜面上方にも散布範囲が広がるものとみられる。1-B区からも7点の須恵器片が出土している。うち1点は瓶類、6点は甕である。先述のように第1トレンチの須恵器はほとんどが1-A区第2層から出土しているのに対し、1-B区北側では第3層中から甕3点、第5層直下から甕2点が出土している。

それでは、現時点の接合検討の結果をもとに第1トレンチの出土状況について検討したい。まずA-a地点の散布状況について、斜面上方側から倒れたものと推測したが、実際に出土地点が近接する高杯蓋（1）2片が接合したため、大きく原位置を動いてはいないとみられる。同様に須恵器片が密集しているA-d地点についても、同一個体をなす甕（4）の破片7点、無蓋高杯（2）15点は極めて近接した場所から出土している。甕を据え付けた痕跡などは認められなかったが、接合検討の結果からも原位置を留めている可能性が高いといえよう。また瓶類（3）についても、一部A-f地点や1-B区に広がってはいるものの、基本的にはA-e地点から出土している。

須恵器片の接合関係については現在も検討中であるが、地点によって器種や破片数、散布状況に差はあれど、基本的には同一個体をなす須恵器片は近接した場所から出土する傾向にあることがわかる。（横白）

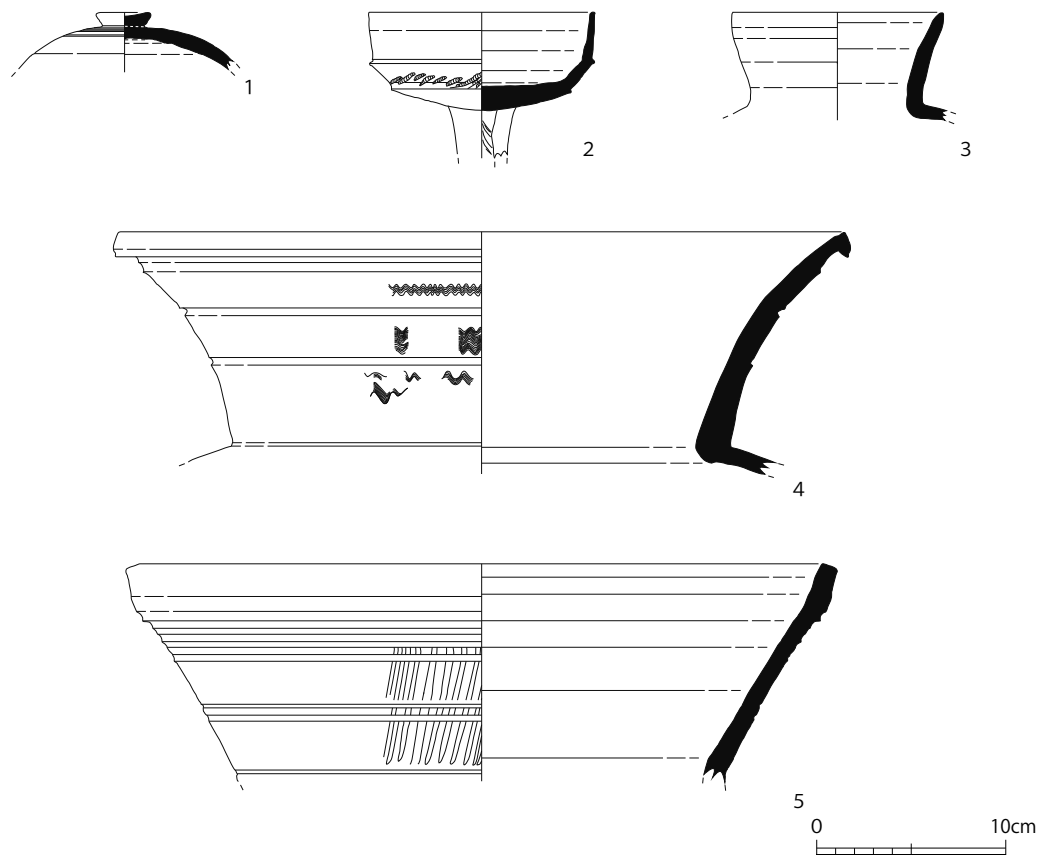


図4 第1トレンチ出土遺物（S=1/4）

④遺物

1 トレンチでは、271 点の須恵器片が出土した。ほとんどが甕で、そのほかの器種として杯類 1 点（1 個体）、高杯蓋 2 点（1 個体）、無蓋高杯 15 点（1 個体）、器台 5 点（1 個体）、瓶類 4 点（1 個体）を確認した。今回は接合関係を確認した高杯蓋（1）、無蓋高杯（2）、瓶類（3）、甕（4・5）を報告する。

1 は高杯蓋。天井頂部にカキ目を施し、扁平で中央がやや凹むつまみを付す。胎土は白色砂粒を多量に含み、非常に粗い。焼成は良好で、色調は灰色（N 4/）を呈する。

2 は 2 方スカシの無蓋高杯。口縁部と杯底部の境に突帯と段をもち、その間には条線を施す。杯底部はヘラケズリののちにナデ調整をおこなう。脚部内面にはしぼり痕が確認できる。胎土は白色砂粒を含み、焼成は良好、色調は灰色（N 4/）を呈する。

3 は瓶類の口縁部。体部と頸部の境に頸部成形用の粘土をなでのぼした痕跡が残り、円盤閉塞の痕跡も確認される。体部内面には当て具痕を残す。胎土には微量の砂粒を含み、焼成は比較的良好である。色調はオリーブ味のある灰色（7.5Y 7/1）を呈し、断面をみると体部表面ににぶい橙色（7.5YR 6/4）の層が確認される。

4・5 は甕。4 は甕の口縁部～頸部。口縁部には 3 条の波状文が施され、それぞれ段によって区画する。体部と頸部の境に頸部成形用の粘土をなでのぼした痕跡がナデ調整が不十分のために明瞭に残る。胎土は黒色微砂粒と白色砂粒を含み、焼成は良好である。

5 は甕の口縁部。体部外面はナデ調整ののち縦方向の条線を施し、2 段に区画する。胎土は黒色微砂粒を含み、焼成は良好である。（山内愛弓）

⑤小結

本トレンチでは、1-A 区を中心に須恵器片が多数出土した。ここからは上記の成果をまとめつつ、遺構（場）の性格について検討をおこなう。

まず、須恵器は主に第 1・2 層中、もしくは第 2 層の底面で出土した。1-A 区の北・東部では斜面下方に倒れ込むように出土したものもあるが、A-d 地点付近では、同一の甕（4）を構成する破片が第 2 層底面から出土したものを含めて、放射状に出土していることから、ほぼ原位置を保っていると考えられた。据え付け痕は確認できなかったが、1-B 区では遺物の出土が希薄であることも踏まえると、この付近を中心として、須恵器を用いた何らかの行為がおこなわれたとみてよいだろう。他に掘り込んだり埋め立てたりしたような遺構を示す堀方も認められなかったことから、この張り出し部が埋納や埋葬に伴って形成された地形ではないことがわかる。出土遺物のうち大部分が甕であるため、明確な時期幅などはわからないが、甕のタタキ目や当て具痕にバリエーションが認められることから、複数回にわたる行為があったことも想定できよう。また、後述する第 3 トレンチに比べて、甕の占める割合がきわめて大きいという器種構成の違いから、それぞれ性格の異なる行為がおこなわれていたと考えられる。なお、より標高の高い A-f 地点にも破片が散布していることから、その範囲はトレンチ外、斜面上方にも広がる可能性が高い。立地状況から、須田平野古墳を意識して設けられた空間である蓋然性が高いが、明確な判断材料は今のところない。後期古墳にみられる石室内や羨道・前庭付近での大甕祭祀の例との関係も視野に入れた検討を今後おこなう必要がある。

また、土層断面や須恵器片の出土状況から、上記の須恵器設置に際して地山（第 8・9 層）、

および地山由来の整地土（第 6・7 層）の上面で、張り出し部を整備した状況が想定できる。その後、1-B 区北端付近では第 3～5 層が人為的に埋められているが、その厳密な時期は現状ははっきりしない。なお、第 5 層底面でも須恵器片が数点出土しており、第 6・8・9 層上面で出土した須恵器片との接合資料は現状見つかっていないが、第 3～5 層埋め立てのタイミングで上層（第 6・8・9 層上面）から混入した可能性がある。最終的に、トレンチ北東方斜面に流出しながら、第 1・2 層によって被覆されるという過程を復元することが可能である。（吉永）

（2）第 2 トレンチ

①調査区の設定

須田平野古墳は南東方向から北西方向へのびる尾根の先端に築かれているが、墳丘の南東には 5.0 × 9.0 m 程の平坦面が存在しており、麓からこの平坦面の間には石室前を通る遊歩道が整備されている。本調査区は遊歩道を登りきって平坦面に至る地点から、墳丘上部へと伸びる位置に設定した南北方向の調査区である。墳丘の形態や規模、盛土構築方法などの確認を目的として、当初は東西幅 1.5 m、南北幅 6 m の調査区を設定したが、周溝が存在する可能性などを考慮して南側に 1 m 拡張したため、最終的な調査区の規模は東西幅 1.5 m、南北幅 7 m、10.5 m² である。また、遺構検出は墳丘上面および地山面でおこなったが、盛土構築方法を確認するため、調査区西側に幅 0.3 m のサブトレンチを設定した（図 5）。

②層序と遺構

層序 本調査区は、調査前から表土（第 1 層）がほとんど堆積しておらず、トレンチ南半分は薄く堆積するのみであった。第 2～4 層は後述するように、後世の造成土と想定される。第 5・6 層は墳丘上方からの流土で、墳丘裾付近で厚く堆積している。第 7～32 層は墳丘盛土で、第 14～32 層は直径 2～3 mm 程度の細礫が混じる固くしまった土と、若干粘性があり礫があまり混じらない土を交互に積んでいる。第 33・34 層は地山であり、第 34 層が白色の礫を多く含む地盤で、第 33 層がその風化層である。

遺構 流土を除去すると、調査区南端から約 1.5 m の地点で墳丘盛土の立ち上がり（第 7 層）を検出し、墳丘裾を確定することができた。平面検出した墳丘盛土と地山の境界は、小さな弧を描くように見えるが、東端、西端ともに根による攪乱を受けているため、本来の墳丘裾はより直線的になると考えられる。

墳丘盛土は、先述のように第 14～32 層まで質の異なる土を交互に積んでいるが、第 14～21 層と第 22～32 層で積み方が異なっている。具体的には、下部に当たる第 22～32 層は各層が 5～15 cm 程度の厚みで非常に細かく水平に積まれており、丁寧に突き固められているのに対して、上部にあたる第 14～21 層の各層は相対的に厚く積んでおり、突き固められているような印象を受けない。また、最も新しく積まれた第 7～13 層は墳丘側から順次積んでいるが、質の異なる土を交互に用いるような積み方は観察できない。

周辺の自然地形は南東から北西に向かって低くなるが、調査区内で観察できる地山（第 33・34 層）の上面ラインは標高 67.4～67.5 m でおおむね水平にのび、南側の墳丘裾付近より北側の墳丘中心部の方がわずかに高くなる。墳丘の南東側に平坦面が存在することも考慮すると、尾根の斜面を一部水平にカットし、墳丘を築造するための平坦面を確保している可能性が高いといえる。石室に近い北側で地山の風化層（第 33 層）が確認されるのに対し、南側で

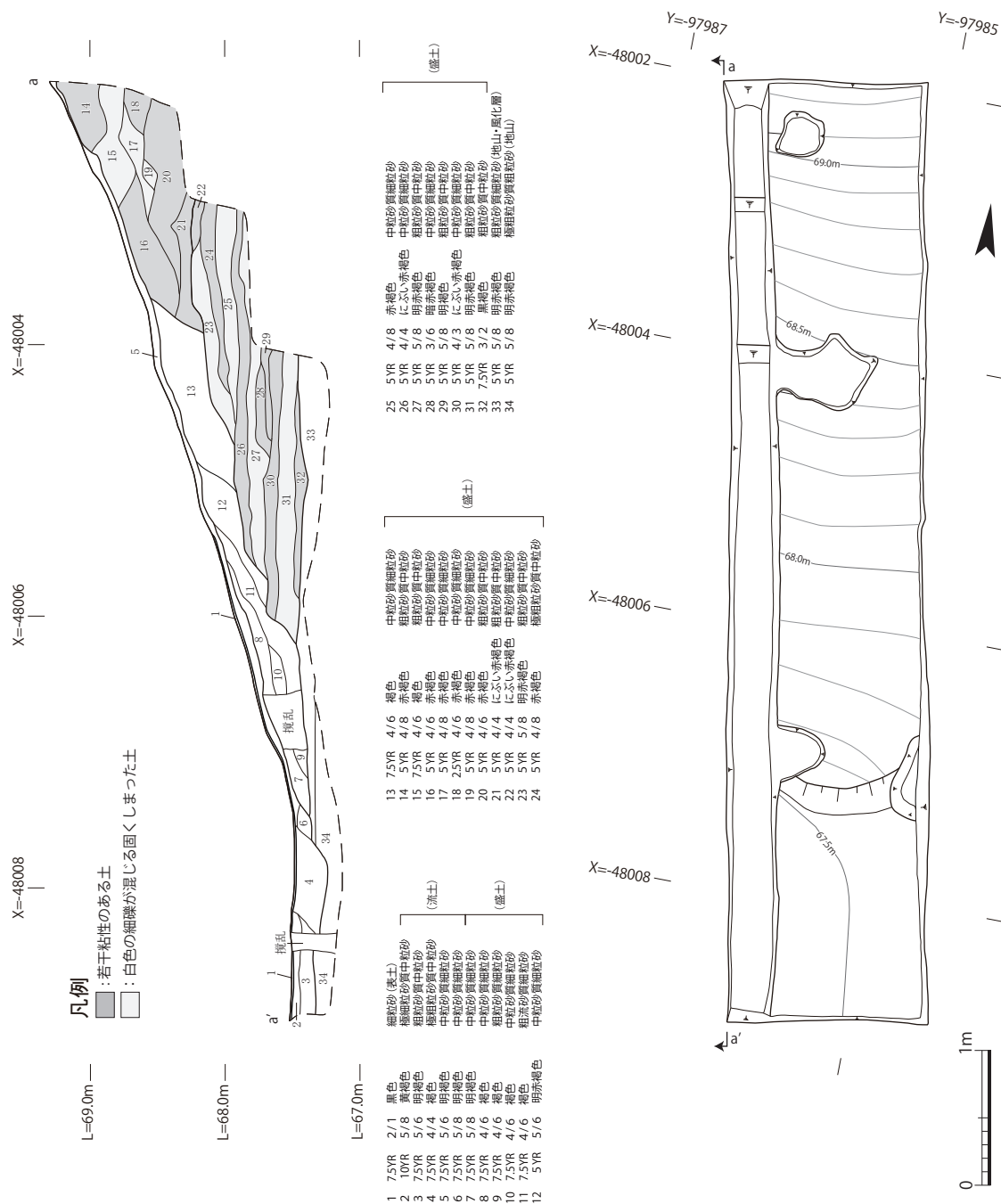


図5 第2トレンチ 平面・土層断面図 (S=1/50)

は確認できないことも、以上のような想定を傍証する。

なお、第34層は第4層の下面で約0.1m落ち込んでいるが、こうした地山の落ち込みは平面では確認できない。また、第4層は流土（第5・6層）を切っていることから、比較的新しい時期に堆積したものと考えられる。調査区南端のすぐ西側には遊歩道の階段が存在することを考慮すると、遊歩道を整備した際に地山まで掘削された可能性があり、第2～4層は後世の造成土と想定される。

③遺物

調査区南端から約2.5m、墳丘斜面下方で、第5層中から焼成不良の須恵器片が1点出土

したが、器種や部位は不明である。

④小結

本調査区では、墳丘の規模・形態や構築方法に関する情報を抽出することができた。まず、地山から墳丘盛土が立ち上がる部分を平面検出して、墳丘裾を確定できた。墳丘の形態や規模については、2022 年度に実施した測量調査の報告の際に、その成果にもとづいて円墳、方墳、前方後円墳の三つの復元案を提示した（京都府立大学文学部考古学研究室 2023）。復元案と今回の調査成果を照らし合わせると、今回検出した墳丘裾の位置は想定される方墳の墳丘裾から大きく内側にずれており、想定される円墳、前方後円墳の墳丘裾と近い位置にある。

また、断ち割り調査によって、墳丘を築造する前に南東側からのびる尾根をカットして、古墳を築造するための平坦面を確保していたことが明らかになった。さらに墳丘盛土に関しては、墳丘中心の石室に近い部分では質の異なる土を交互に積んでおり、その中でも上下で積み方に差があることを確認できた。こうした墳丘盛土の積み方の違いは、後述するように石室の構築と関連した墳丘構築の段階差と想定できる。（藤川聖起）

（3）第3トレンチ

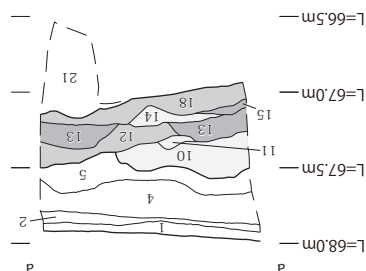
①調査区の設定

本調査区は、第2トレンチと同様に墳丘の形態、規模を確定することを目的とした。南東方向からのびる尾根の先端に築かれた墳丘の北西方には現在、8.6 m × 6.6 m 程の平坦面が広がっており、この平坦面を前方部とみて前方後円墳とする意見がある。また、墳丘北西斜面は、ほかの斜面に比べて等高線が直線的で、方墳とみる意見もある。そこで前方後円墳とみた場合の前方部中軸線上に、墳丘北西斜面から平坦面にかけて長さ 4.5 m、幅 1.5 m の 3-A 区と、長さ 8.2m、幅 1.0m の 3-B 区の2つのトレンチを設定した。また、土層の堆積状況を確認するため、3-A 区ではトレンチ北西側、3-B 区ではトレンチ南東側の斜面部においてそれぞれ幅 0.4 m のサブトレンチを設定した（図6・7）。

②層序と遺構

層序 第1層は表土で、第2層とともにトレンチ全体に堆積する。第2～6層は墳丘の盛土に由来する流土と考えられ、3-A 区を中心に須恵器片が多く出土している。4・5層には炭化物が混じる。第7～9層は周溝埋土で、古墳に伴う遺物が数点出土している。10～18層は墳丘盛土である。第2トレンチと同様に、白色細礫が混じる固くしまった土と粘性のある土を交互に積んでいる。墳丘盛土最下層の第18層は古墳時代の土師器碗が出土しており、暗褐色の色調や砂質であることから旧地表由来の可能性がある。第21・22層は地山である。第21層は第22層の風化層で、厚いところで0.6m以上ある。第22層は固くしまった花崗岩を主体とする基盤層である⁽²⁾。なお、第19・20層は第21層と土色、砂質ともに似るものの、第19層は極細粒砂が混じり、第20層は粘性が高い。いずれも地山由来の流土と考えられる。

墳丘 調査の結果、3-A 区トレンチ南端（標高 67.5m 地点）では白色細礫を含むしまった褐色土と暗褐色の粘質土が交互に堆積する墳丘盛土（第10～18層）が一部遺存するものの、墳丘が大きく削平を受けていることが明らかになった。墳丘盛土はトレンチ南端から 0.65 m の地点（標高 67.0 m）まで確認でき、それより以北は地山（第21層）が露出する。トレンチ以南から削平がおよんでいるとみられるが、確認した墳丘の削平ラインは、トレンチ南端か



14

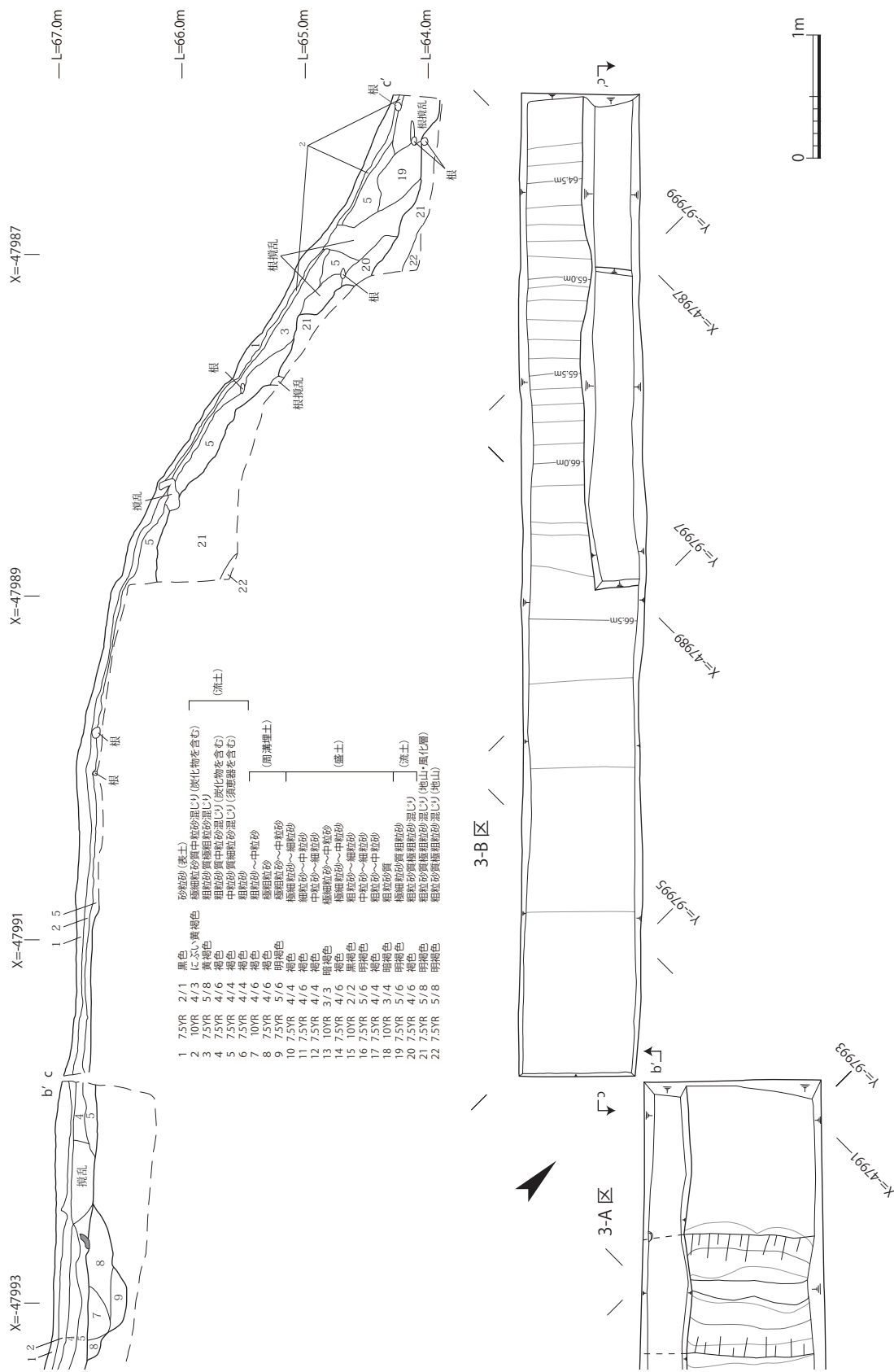


図7 第3トレンチB区 平面・土層断面図 (S=1/50)

ら 0.2m 水平に、そしてほぼ垂直に 0.2m ほど掘りこみ、傾斜しながら地山に接続する。地山の上面ラインは墳丘盛土の遺存するトレンチ南端で最も高く（標高 67.2 m）、後述する周溝にむかって緩やかに傾斜する。第 17 層と地山の境（標高 67.0m）から地山が約 0.5 m 水平に続いていることから、この水平地点では盛土のみが削平され、地山はほとんど削平を受けなかったと考えられる。

周溝 3-A 区のほぼ中央において、トレンチに直交する幅約 1.3 m、深さ約 0.4m の地山を掘りこむ溝を検出した。溝の南肩は遺存する墳丘盛土北端から約 1.5 m 離れているが、上述のように墳丘が大きく削平を受けていること、後述するように古墳に伴うとみられる遺物のみが出土していることを踏まえれば、墳丘に伴う周溝とみるのが自然である。溝の埋土は上層（第 7 層）・下層（第 8 層）・最下層（第 9 層）の 3 層に分けられ、各層で遺物が出土している。最下層は自然堆積層、下層は墳丘削平に伴う流土と考えられ、上層は 1 度溝が埋まったのちに新たに掘り込まれた可能性がある。特に最下層からは古墳時代後期の土師器片が出土しており、古墳築造時のものの可能性がある。周溝底部のレベルは西側で標高 66.45 m、東側で標高 66.37 m と北東にむかってわずかに傾斜しており、東方に向かって排水していた可能性がある。

③遺物の出土状況

図 8 はトレンチ内における遺物の散布状況を平面・断面図上に落とし、さらに破片の接合状況について示したものである。なお、断面図の散布状況図については壁面から出土した以外のものも示しているため、出土地点と出土層位は厳密には対応しない。

ほとんどの遺物が墳丘側の 3-A 区から出土しており、いずれも古墳時代の遺物である。周溝付近を中心にトレンチ内に満遍なく散布している。散布する遺物の多くは須恵器で、後述するように高杯が多い傾向にある。流土と周溝埋土から出土しているが、周溝最下層の埋土からは出土していない。一方、土師器は主として周溝埋土や盛土内から 1 点（18）出土しているが、流土からはほとんど出土していない。3-B 区からは須恵器片が 2 点出土しており、うち 1 点は 3-A 区から出土した遺物と接合する（9）。もう 1 点は壺の破片であり、接合はしないが器種や胎土の特徴が類似し、同一個体の可能性をもつ破片が 3-A 区から数点出土している⁽³⁾。流土中から出土した土器片と周溝埋土から出土した土器片が接合する個体が複数あることを踏まえると、周溝埋土より上層で出土した土器は、墳丘の削平時に二次的に動いたものである可能性が高い。（井川瑞季・守田悠）

④遺物

第 3 トレンチからは 98 点の須恵器片と 22 点の土師器片が出土した。須恵器片は器種別にみると杯蓋 1 点、杯身 9 点、高杯蓋 18 点、有蓋高杯 20 点、無蓋高杯 5 点、高杯脚部 22 点、壺 4 点、そのほか器種不明の細片である。それぞれ杯蓋 1 個体（1）、杯身 4 個体（2～5）、高杯蓋 3 個体（6～8）、有蓋高杯 2 個体（9・12）、無蓋高杯 1 個体（13）、高杯脚部 4 個体（10・11・14・15）、壺 2 個体（16・17）に復元することができる。土師器片は細片が多いが、椀（18）⁽⁴⁾、短頸壺（19）、壺（20）が確認できる。

須恵器 1 は口径 15cm を超える杯蓋。天井部は丸みを持ち、口縁を丸くおさめる。外面の一部には黒色の自然釉がかかる。2～5 は杯身。いずれもやや長く伸びる立ち上がりをもつ。

2 は口縁端部がわずかに残るのみで口径 14cm と推定される。3 は口径 15cm 前後であるが、4 は口径 15.3cm、5 は口径 16.4cm と大型である。4・5 とともに底部をヘラケズリで調整する。6～8 は高杯蓋。6 は天井部と口縁部との境に明瞭な段を形成し、天井頂部にはカキメを施す。本来はつまみをもつが欠損する。7 は天井部と口縁部との境に沈線をもち、鈍い段を形成する。天井頂部には扁平なつまみを付す。口縁端部内面に稜をもつ。比較的焼成が不良で、軟質である。8 は平坦な頂部からなだらかなカーブを描きながら口縁部へ至り、やや内斜しておさまる。天井頂部には扁平で中央が凹むつまみをもつ。9 は 3 方スカシの有蓋高杯で、口径 14.9cm である。脚部中央にめぐる沈線がわずかに残存する。10 は 2 段 2 方スカシの高杯で、杯底部と脚部上位にカキ目を施す。脚部中央には 2 条の沈線をめぐらせる。11 は 2 段 2 方スカシの高杯。脚部中央に 2 条、裾部に 1 条の沈線をめぐらせる。12 はスカシをもたない有蓋高杯で、口径 16.2cm を測る。杯部と脚部の接合部には丹念なナデを施し、滑らかに仕上げる。杯部外面には緑色の自然釉がかかる。第 1 層から出土した破片は明褐灰色（7.5YR 7/1）、それ以外の層から出土した破片は灰黄色（2.5YR 7/2）～灰白色（N 7/）を呈す。9～11 の脚部内面にはしぼり痕が確認できる。13 は無蓋高杯の杯部で、口径 10.4cm である。口縁部の下位に 1 条の突帯と段をめぐらせる。口縁部は屈曲し、やや外上方に伸びる。14 は高杯の脚部。脚端部付近の内面に稜をもつ。脚端部は上下にわずかに拡張し、面をつくる。同一個体の破片から脚部を復元すると、3 方スカシであったと推測される。15 は高杯脚部。裾部に 1 条の沈線がめぐる。16・17 は壺の底部⁽³⁾。16・17 とともに外面にカキ目を施し、内面に当て具痕を残す。底部はやや平底ぎみで、体部に比べて器壁が薄い。16 は 2024 年度に実施した発掘調査で石室から出土した壺片と接合することが確認された。

また 3～5 のような大型の杯身については湯舟坂 2 号墳でも出土しており、これらは但馬の 7 世紀代の須恵器に類例があると指摘されている（稲本 2025）。丹後地域では京丹後市久美浜町アバ田 1 号墳（荒川 1988）や同市丹後町高山 7 号墳（増田・森 1988）などに類例がみられる。

（山内愛弓）

土師器 18 は碗の口縁部～底部である。第 13 層（盛土）から出土した。内面に直径 1mm の金雲母砂粒、外面に直径 1～2mm の白色砂粒が混じる胎土で製作されている。内面をナデ調整するが、外面体部下半のヘラケズリを省略している。口径 12cm、器高 4cm 程度である⁽⁵⁾。19 は壺である。第 10 層（盛土）から出土した。金雲母砂粒が混じる胎土で製作されており、内面上部にヘラケズリ、内面下部にナデ調整が施されている。20 は短頸壺の頸部である。第 13 層（盛土）から出土した。壺と同じく金雲母砂粒が混じる胎土で製作されており、内面にヘラケズリ、外面にヨコナデが施されている。

（石川達葵）

年代と評価 須恵器の年代について陶邑編年を参考にすると、TK43 型式併行期の様相を示すものが多く、後段階の TK209 型式併行期やより新しい時期に比定できるものも存在する。須恵器全体では 3～4 段階ほどの型式差が認められよう。一方、土師器については、盛土（第 13 層）から出土した土師器碗（18）が福島孝行編年（福島 2001）の丹後後期 3 式（TK10 型式併行期）にあたるとみられ、周溝埋土最下層（第 9 層）出土の壺も古墳時代後期に位置づけられると考えられる。周溝埋土出土遺物は原位置を保っていると評価することができ、古墳築造の時期は周溝埋土最下層や盛土出土の土師器から古墳時代後期後半と考えられ、周溝の埋

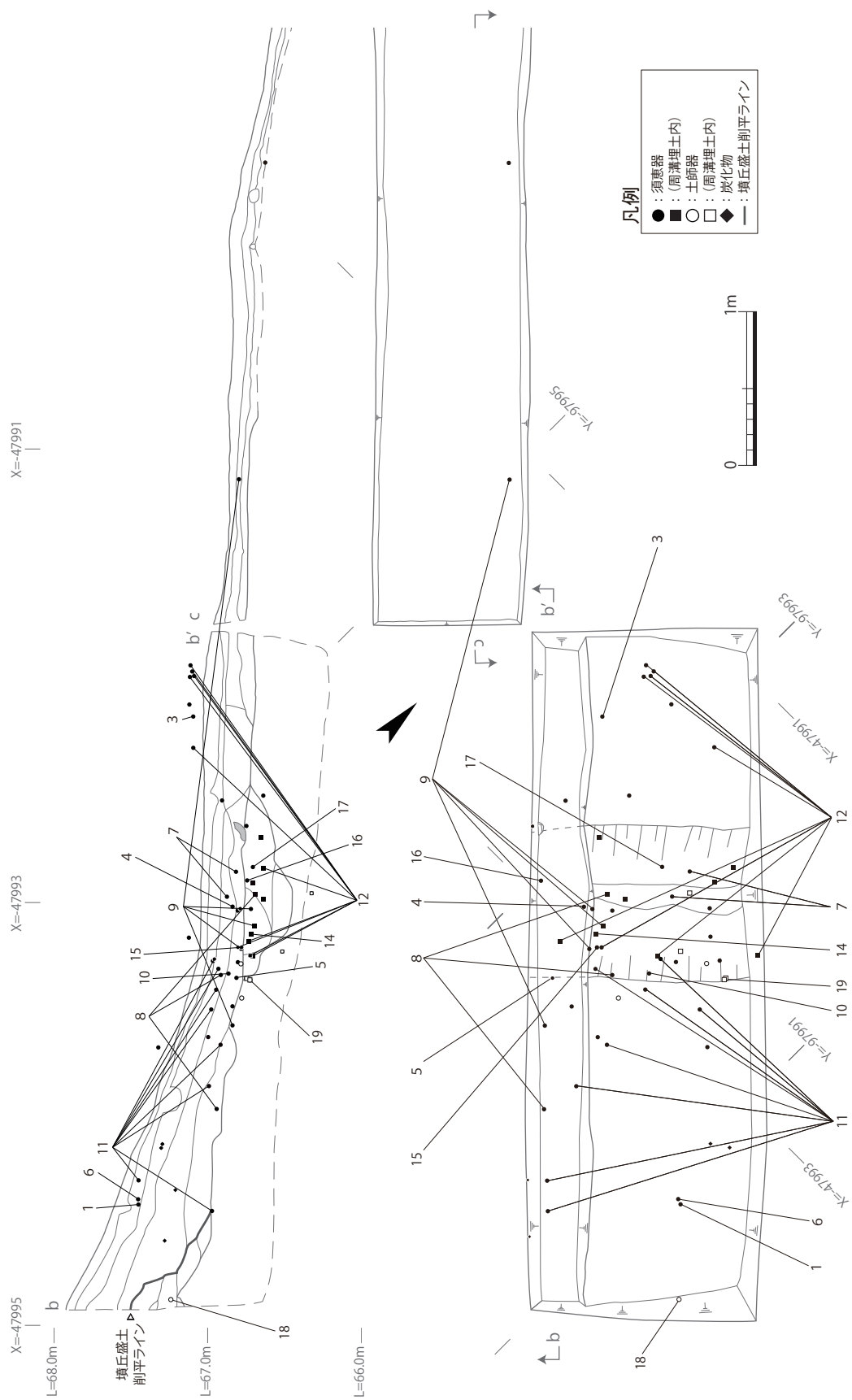


図8 第3トレンチ遺物出土状況 (S=1/40) (番号は図9に対応)

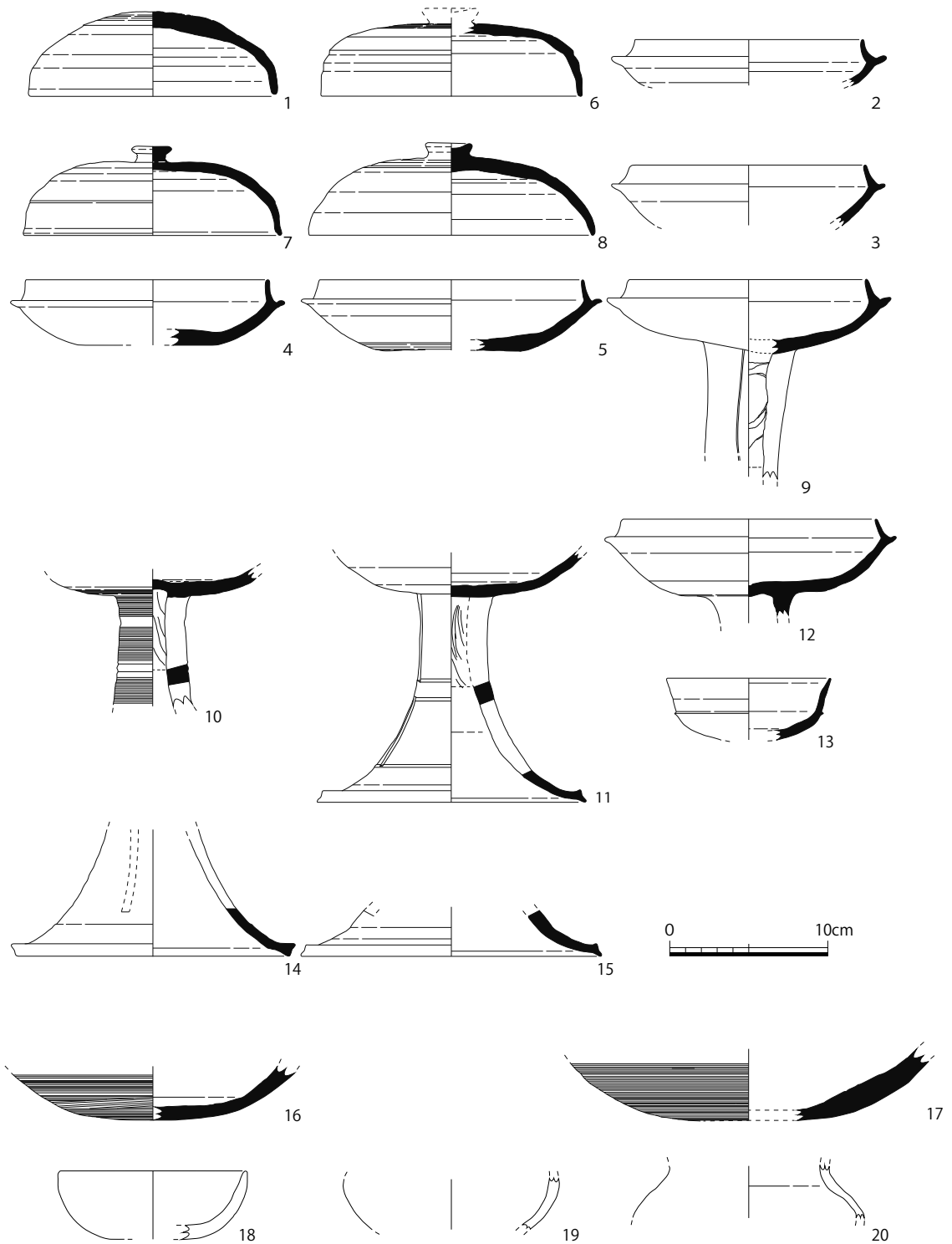


図9 第3トレンチ出土遺物（S=1/4）

没開始時期は7世紀代となる。

⑤小結

第3トレンチの調査では、墳丘盛土、周溝とみられる溝、溝北方に広がる平坦面を確認した。まず墳丘については一部残存していたものの、後世に大きく削平を受けていることが明らかになった。とりわけ前方部の可能性も指摘されていた平坦面上において、幅約 1.3 m、深さ

約 0.4 m の周溝を検出した。この周溝は地山を掘り込んでいることから、古墳築造時には現状とほぼ同じ平坦面が形成されていたものとみられる。墳丘の削平時期を示す遺物は出土していない。また、周溝外側北方に広がる平坦面上では顕著な遺構は検出されておらず、その性格については不明である。

遺物については、TK43 型式併行期に比定される須恵器が多く出土した。口径が大きく長い立ち上がりをもつ有蓋高杯や扁平なつまみを付す高杯蓋などは、湯舟坂 2 号墳奥壁部から出土した一群と類似する。時期はやや降るが大型杯身が出土する点も共通しており、須恵器からみても須田平野古墳と湯舟坂 2 号墳の共通性がうかがえる。

第 3 トレンチから出土した土器は本来墳丘上に配置されていた可能性も想定されるが、墳頂部には平坦面は認められず、墳丘斜面にも遺物が散布していないことからその可能性は低いだろう。むしろ第 3 トレンチ出土の壺片（16）と石室内出土の壺片が接合関係にあるという事実から、第 3 トレンチの土器は後世に石室から掻き出された可能性が想定される。兵庫県豊岡市城崎町ケゴヤ古墳では多量の土器が馬具とともに墳丘北方の溝底から出土しており、石室内に副葬されていた土器が後世に掻き出された可能性があると推定されている（瀬戸谷編 1987）。兵庫県養父市八鹿町夕垣 7・9 号墳では羨門部の斜面上方側の溝内から石室内のものよりも古い様相を示す土器が出土し、追葬時に石室から運び出されたとみている（兵庫県教育委員会編 1983）。第 3 トレンチの土器についても本来石室内に副葬され、追葬もしくは後世の再利用時に放棄された土器が含まれている可能性は十分ある。（井川・守田・山内）

5. 考察

（1）墳丘の形態と規模

先にふれたように、須田平野古墳の墳丘形態については、円墳・方墳・前方後円墳という 3 つの可能性が指摘されてきた。そうした中、今回の発掘調査により、墳裾や周溝が検出され、当古墳の墳丘に関する重要な情報を得ることができた。

まず、第 3 トレンチでは、前方部の可能性が指摘されてきた平坦面の取り付け部付近で周溝が検出されたことから、この平坦面は墳丘ではないことが明らかになった。つまり、当古墳の墳丘は石室を覆う丘状部分だけであり、前方後円墳ではない。また、第 2 トレンチで検出された墳裾は、方墳として復元するには墳丘内側寄りをカーブ気味にめぐっており、やや不自然な墳裾ラインとなる。墳丘北西付近の等高線が直線的で、方墳のようにみえるのは、第 3 トレンチで判明したように後世の削平によるものと考えられる。

以上から、須田平野古墳は円墳の可能性が最も高く、その規模は、直径約 16.5 m、高さ約 3.5 ～ 4.0 m に復元できる。これまで、地形情報から複数の可能性が指摘されてきた墳丘形態・規模について、発掘成果にもとづいて議論できるようになったことは大きな成果といえよう。一方、墳丘北西方の平坦面や、南東方の須恵器が散布する張り出し部の性格については、今後の課題として残される。（吉永）

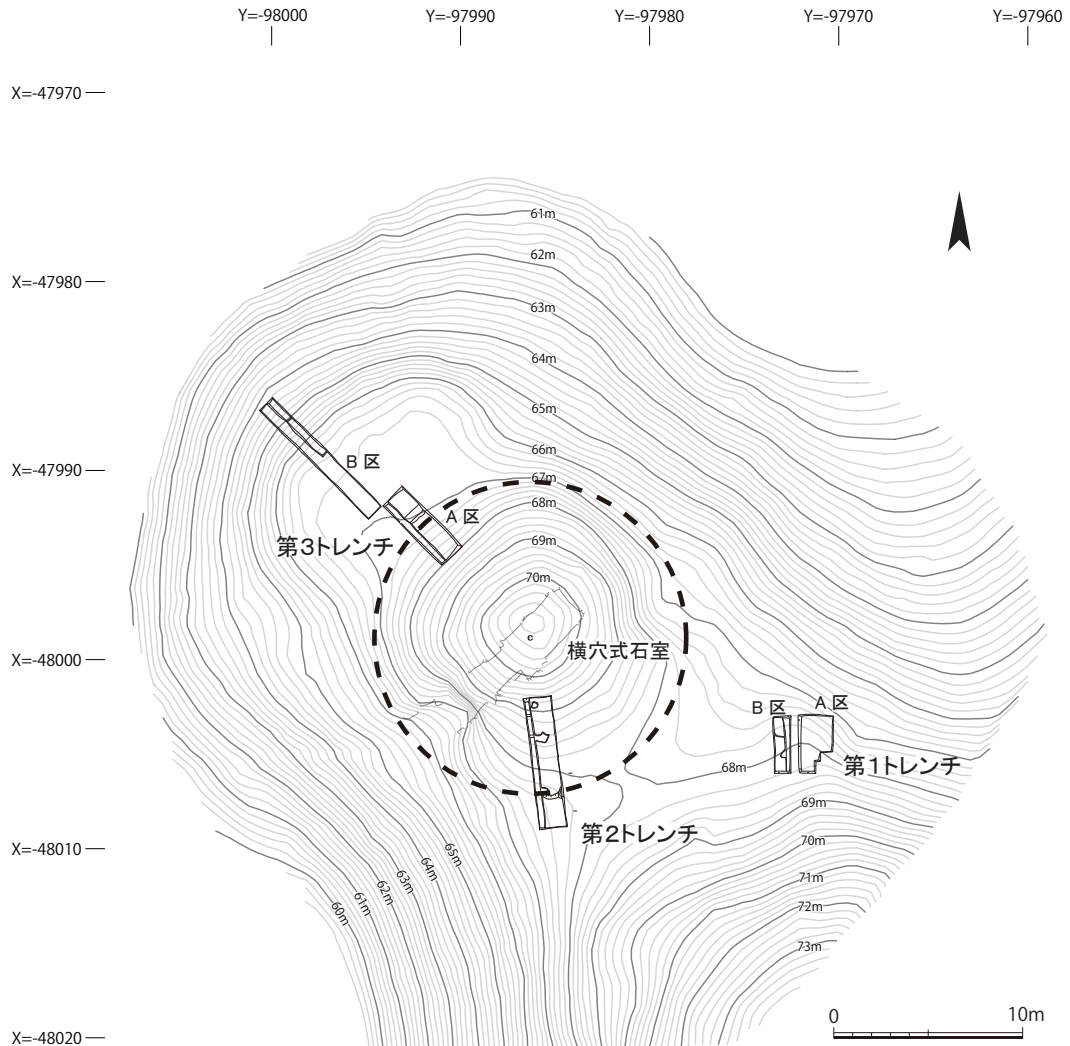


図 10 墳丘形態の復元 (S=1/400)

(2) 墳丘と石室構築の関係

第2・3トレンチの調査や、これまでに実施された墳丘や石室の測量調査の成果を踏まえて、墳丘の構築と石室の構築の関係について若干の考察を述べる。

まず第2・3トレンチと石室の位置関係を確認しておく。第2トレンチは石室の主軸に対して約45度傾いて設定されている。土層はトレンチ西壁で観察しており、その延長部分は玄室左袖部付近にあたると考えられる。第3トレンチは石室主軸にほぼ直交するように設定されており、A区で土層を観察したトレンチ南壁の延長部分は玄室右側壁にあたる。なお、第2トレンチの北端は玄室左袖部から約1mの距離にあるが、第3トレンチA区の南東端は玄室右側壁から約5m離れた距離にある(図11)。また、第2トレンチは墳丘盛土がよく遺存していたが、第3トレンチA区の墳丘盛土は大きく削平を受けていた。よって、基本的には第2トレンチの調査成果にもとづいて墳丘の構築と石室・地山との関係について考察し、必要に応じて第3トレンチA区の調査成果についても触れることとする。

図11は、第2トレンチ、第3トレンチA区の土層断面図と石室玄門を、便宜的に標高をそろえて提示したものである⁽⁶⁾。まず地山についてみると、第2トレンチにおける地山の上

面ラインは、標高 67.4 ～ 67.5 m でほぼ水平にのびる。石室測量調査の成果報告では、構築時の作業単位と対応するとみられる、石材を水平に揃えたラインを目地として第 1 ～ 3 単位が設定されており（京都府立大学文学部考古学研究室 2024）、これを参考にすると第 2 トレンチ西壁の延長部分と考えられる玄室左袖部付近の第 2 単位上面は 67.6 m で、前壁の下端面も同レベルとなる。第 2 トレンチにおける地山がそのまま水平にのびれば、第 2 単位の上面とおおむね対応するため、左側壁第 2 単位までの石材は地山を大きく掘り込んだ墓壇に据えられている可能性が高い。また、前壁の下端面も同レベルとなることから、前壁をこの時点で架構した可能性も考えられる。第 3 トレンチにおける地山も確認してみると、A 区の地山上面はトレンチ南東端付近において 67.2 m で、トレンチ北西に向かうにつれて低くなる。須田平野古墳の墳丘は南東方向からのびる尾根の先端に築かれており、自然地形は南東方向が高く北西方向が低くなっている。こうした地形の影響により、第 3 トレンチ A 区では第 2 トレンチに比べて地山が低い位置で検出されたとみられる。右側壁の第 2 単位は 67.0 ～ 67.6 m であり、A 区で観察できる地山のレベルはその中間に位置する。地山がこのまま石室に向かって水平にのびるのか、それとも自然地形の通りに石室側がより高くなるのか現状では判断できず、石室右側壁の構築単位と地山の関係に言及することは難しい。第 3 トレンチ A 区は石室との距離が離れていることもあり、右側壁の作業単位と地山との関係は今後の課題である。

次に墳丘盛土について確認する。第 2 トレンチでは、第 7 ～ 32 層で墳丘盛土が確認されている。このうち、第 14 ～ 32 層は直径 2 ～ 3 mm 程度の細礫が混じる固くしまった土と、若干粘性があり礫があまり混じらない土を交互に積んでいる。とりわけ、下部の第 22 ～ 32 層は細かく水平に突き固められており、上部は相対的に厚く積まれていた。これらに対し、第 7 ～ 13 層では明確な土の質の使い分けが観察できなかった。このように、墳丘盛土の積み方には上部と下部、中心部と周辺部で差があり、墳丘構築の段階差が看取できる。ここでは墳丘構築の段階差を明示するため、第 22 ～ 32 層を 1 段階、第 14 ～ 21 層を 2 段階、第 7 ～ 13 層を 3 段階と呼称する。1 段階最上部の第 22・23 層の上面は標高 68.2 ～ 68.3 m である。石室の天井石をみてみると、奥壁から 1 ～ 3 石目の下端面と玄門の天井石の上端面が 68.4 ～ 68.5 m で、おおむね対応する。ここから、1 段階は石室第 3 単位の構築と対応するとともに、玄室の天井石を架ける際の作業面を構築した盛土と想定できる。この 1 段階が玄室の天井石を架構する際の作業面を形成した盛土と考えるならば、2 段階は天井石を覆った盛土と考えるのが妥当であろう。2 段階で天井石を被覆した後、その上から 3 段階の盛土が積まれたと考えられる。ここで隣接する湯舟坂 2 号墳の調査成果をみてみると、第 3 トレンチの南西壁では「厚

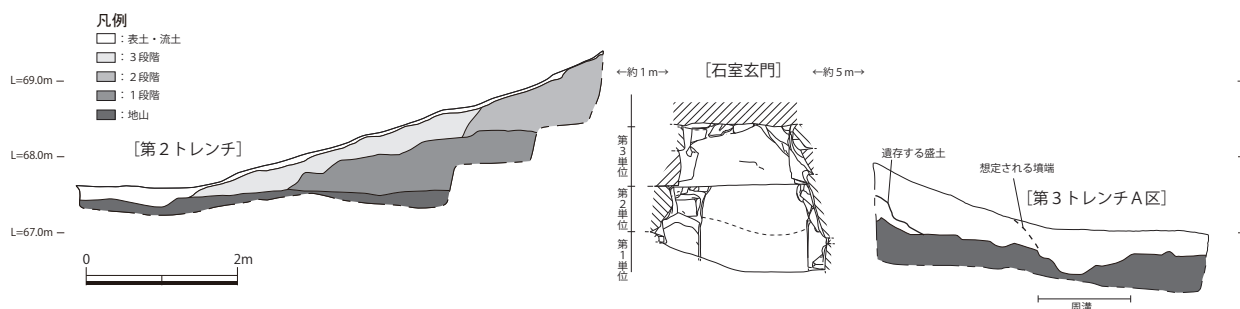


図 11 墳丘と石室の関係様式図（北東方向から）（S=1/100）

さ1mを越える縞状をなす墳丘盛土層」が観察されている（奥村編1983：31頁）。湯舟坂2号墳は墳丘上部が大きく削平されており、単純な比較はできないものの、須田平野古墳の1段階と同様の墳丘盛土構築方法がとられていた可能性がある。

今回の調査では、地山や墳丘盛土と石室構築の作業単位に関する情報を多く抽出することができた。特に、側壁構築と天井石の引き上げに対応した1段階の盛土や天井石を被覆した際の2段階の盛土、そしてそれらの上からさらに積まれた3段階の盛土を読み取ることができた。この成果を墳丘盛土の段階差を良好に捉えた山口県岩谷古墳の調査成果と比較すると、須田平野古墳の1段階と2段階の盛土はいわゆる第一次墳丘に、3段階の盛土がいわゆる第二次墳丘に相当する（山口県教育委員会1972）。第一次墳丘の中でも、石室の構築と関係した墳丘盛土構築の段階差を捉えることができた点が、今回の調査の大きな成果といえる。ただし、今回墳丘盛土がよく観察できた第2トレンチは石室主軸に対して約45度傾いて設定された調査区のため、玄室の大部分の構築との直接的な関係は不明である。また、玄室に直交する第3トレンチA区で確認できた墳丘盛土は大きく削平を受けており、石室との距離も遠く、右側壁の構築単位と地山や墳丘盛土との関係は明確にできていない。今後の調査で、墳丘の構築と石室・地山とのより直接的な関係を捉えられることに期待したい。（藤川）

6. おわりに

一昨年度の墳丘測量、昨年度の石室実測の報告に続き、本稿では須田区では湯舟坂2号墳以来40年ぶり、須田平野古墳に対しては初めてとなる発掘調査の成果について報告した。第1トレンチから出土した大量の須恵器片についてはまだ接合作業を継続中であり、須田平野古墳に対する発掘調査もまだ続いている。最終的な報告は改めておこなう必要があるものの、人の入れ替わりの激しい大学の調査において、発掘に携わったものが遺構・遺物に対する基礎情報をまとめ、現時点での仮説を提示し、残された課題を整理しておくことは、たとえ最終的な解釈が変わったとしても、必要なことと考えている。

発掘調査によって得られた成果は多々あるが、とりわけ以下の3点について特記しておきたい。第一は諸説あった須田平野古墳の墳丘が直径16.5m、高さ3.5～4.0mの円墳と確定したことである。その最大の根拠となる第3トレンチの周溝は今年度の第4トレンチでも確認しており、少なくとも墳丘北西部については周溝がめぐっていたとみてよいだろう。一方で尾根側の第2トレンチでは周溝は確認されず、周辺地形からみても周溝は全周していなかった可能性が高い。立地は大きく異なるものの、直径18mの円墳である湯舟坂2号墳と、石室規模も含めてほぼ同規模の古墳であったとみて大過ない。

第二は、第2・3トレンチで墳丘盛土と地山（基盤層）を確認したことである。これにより、須田平野古墳の築造にあたって南東方向からのびる尾根をまず水平にカットし、墳丘をほぼすべて盛土によってつくっていること、石室は地山をさらに掘り込んで構築されたとみられること、石室構築段階と対応して墳丘構築にも段階差があり、両者が一連の行程で築造されたことなど、様々なことが明らかとなった。なお、前報告では、須田平野古墳と湯舟坂2号墳の石室形態に密接な関係性が認められることが指摘されていたが、両者は墳丘構築方法にも共通性が認められる可能性がある。

第三は須田平野古墳に伴うとみられる土器が各所で豊富に出土したことである。第1トレンチでは墳丘外の張り出し部に須恵器甕などが据え置かれていた状況が復元され、その位置や年代から、須田平野古墳に関連する可能性がある。第3トレンチからも、石室開口部から離れた位置にあるにもかかわらず、100点近い土器片が出土した。周溝や墳丘裾に土器を供献する行為がおこなわれていた可能性も考えられるが、石室から持ち出され周溝内に投棄された可能性も考えられる。いずれにしても古墳の時期を示す資料として評価することが可能であり、それらの時期幅がTK43型式期からTK209型式期におさまることからみて、石室形態からは湯舟坂2号墳に先行する可能性が考えられていた須田平野古墳の築造や、追葬を含む祭祀行為が、湯舟坂2号墳とほぼ並行することが明らかとなりつつある。

課題も山積している。墳丘外張り出し部についてはまだ調査を継続しており、その性格については今後の課題とせざるを得ない。石室内の調査も始まったものの、分厚い堆積層に阻まれ、まだ古墳築造時の状況は明らかでない。今後の調査の進展によって、上記の解釈については変更を迫られるかもしれないが、発掘調査をすることによって初めて明らかとなったことがたくさんあり、そのほとんどが発掘調査をしなければ永遠にわからなかったことは確かである。今後も京丹後市教育委員会と協力しながら調査を継続し、須田平野古墳の基礎情報の更新や、正確な情報にもとづいた古墳の地域資源化に努めたい。（菱田哲郎・諫早）

付記

なお、本稿は令和4年度京都府立大学地域貢献型特別研究（ACTR）「過疎化が進む地域における文化遺産の地域資源化に向けての実践的研究—京丹後市久美浜町須田区からの発信—」、および日本学術振興会科学研究費基盤研究（B）「古墳・副葬品の多角的検討にもとづく日本列島初期仏教受容史の再構築」（22H00719・23K21991）の成果の一部である。

註

- （1）『京都府』「京都市町村共同 統合型地図情報システム〔GIS〕」

<https://g-kyoto.gis.pref.kyoto.lg.jp/g-kyoto/PositionSelect?mid=671&mtp=pfm>

- （2）小滝篤夫氏のご教示を得た。記して感謝したい。

- （3）2024年度に実施した須田平野古墳の発掘調査では石室内から壺片が出土しており、第3トレンチA区の壺片と接合することが確認されている。詳細は次年度報告する予定である。

- （4）以下、本稿における「土師器碗」は福島孝行の定義に従い、径高指数（器高／最大径×100）が36以上50未満のものを指す（福島2001）。

- （5）京丹後市久美浜町谷垣1号墳からこれとよく似た法量の土師器碗（図130-15／口径12.8cm・器高4.8cm程度）（岡崎1998）が出土している。これは福島孝行編年（福島2001）の丹後後期3式（TK10型式併行期）の基準資料となっている。

- （6）第2トレンチ、第3トレンチA区、石室玄門は一直線上に並ぶ位置関係にはない。また、本文中に明示したように、各トレンチと石室の距離は第2トレンチと第3トレンチA区で大きな差がある。ここではそれらの条件は考慮せず、墳丘の構築段階と地山や石室の構築段階との関係を説明するために、便宜的に各トレンチと石室玄門を並べて提示している。

参考文献

- 荒川史 1988 「アバ田古墳群」『京都府遺跡調査概報』第 29 冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 稲本悠一 2025 「湯舟坂 2 号墳の土器と被葬者像」『地域資源としての湯舟坂 2 号墳』（京都府立大学文化遺産叢書 第 33 集）京都府立大学文学部歴史学科
- 梅原末治 1920 「川上村古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告』第二冊 京都府教育委員会
- 岡崎研一 1998 「谷垣古墳群」『京都府遺跡調査概報』第 83 冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 奥村清一郎（編）1983 『湯舟坂 2 号墳』久美浜町教育委員会
- 京都府熊野郡役所 1923 『京都府熊野郡誌』
- 京都府立大学文学部考古学研究室 2023 「京丹後市須田平野古墳の調査（1）」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第 9 号 京都府立大学文学部歴史学科
- 京都府立大学文学部考古学研究室 2024 「京丹後市須田平野古墳の調査（2）」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第 10 号 京都府立大学文学部歴史学科
- 久美浜町史編纂委員会（編）2004 「考古」『久美浜町史 資料編』久美浜町教育委員会
- 瀬戸谷皓（編）1987 『上山・ケゴヤ古墳』（城崎町文化財調査報告書 9）城崎町教育委員会
- 田中彩太 1973 「丹後地域の古墳概観」『同志社考古』第 10 号 同志社大学考古学研究会
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
- 橋本勝行 1998 「Ⅶ丹後」『古代の土器』5-2 古代の土器研究会
- 菱田哲郎 2025 「須恵器もどきの土師器—湯舟坂 2 号墳からみた器の革新—」『地域資源としての湯舟坂 2 号墳』（京都府立大学文化遺産叢書 第 33 集）京都府立大学文学部歴史学科
- 兵庫県教育委員会（編）1983 『夕垣古墳群・夕垣遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会
- 福島孝行 2001 「丹後の古墳時代中・後期の土師器Ⅰ」『京都府埋蔵文化財論集』第 4 集 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 細川康晴 2000 「横穴式石室の導入と展開」『丹後の弥生王墓と巨大古墳』（季刊考古学別冊 10）雄山閣
- 増田孝彦・森正 1988 「高山古墳群・高山遺跡」『京都府遺跡調査概報』第 29 冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 山内陽詳 1988 『畑大塚古墳群』（京都府久美浜町文化財調査報告第 10 集）久美浜町教育委員会
- 山口誠司 2014 「久美浜町の横穴式石室について」『同志社考古』第 13 号 同志社大学考古学研究会
- 山口県教育委員会 1972 『下関市岩谷古墳発掘調査報告』
- 横田真吾 2018 「群集墳の終焉と土器について—奈良県龍王山古墳群と土器編年の比較から—」『待兼山考古学論集Ⅲ—大阪大学考古学研究室 30 周年記念論集—』大阪大学考古学研究室



写真7 第1トレンチ完掘状況（北西から）



写真8 第2トレンチ完掘状況（南西から）



写真9 第3トレンチ A区完掘状況（北から）



写真10 第3トレンチ B区完掘状況（北西から）



写真11 第1トレンチ・第3トレンチ出土遺物（番号は図4・9と対応）

編集後記

余裕をもって仕事に取り組みたい。一つ仕事が終わる度に今度こそはと思うが、今回も果たせなかった。文字通りバタバタ。年末から長い師走が続いている。一つの救いは、春からのフィールドワークに始まり、冬の集報に終わるこの一連の営みが、10号を越え、府大歴史学科の伝統として根付きつつあること。フィールドをご提供いただいた関係各所のご厚意に深く感謝申し上げたい。

なお本書の組版作業は、歴史学科文化遺産学コースの合同実習メニューとして学部生が Adobe 社の InDesign を利用しておこなっているが、もちろんそのままでは本にはならない。一書にまとめるにあたって力を尽くしてくれた大学院生の頑張りにも深く感謝したい。(い)

京都府立大学文学部歴史学科

フィールド調査集報 第 11 号

編集・発行 京都府立大学文学部歴史学科

〒 606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5

発行日 2025 年 3 月 31 日

印刷 株式会社 北斗プリント社

〒 606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2
